

で、牛（1頭から数1000まで）、馬、その他の家畜、金銀、衣類、穀物、武器、人員、領土領民などが挙げられている。ソーマ祭を基盤として、王の即位式、戦車競技、馬の放牧による領土の独占宣言、鷹の形をした火壇の構築等、様々な要素が結び付き、多種多様な目的に応じた長期かつ大規模な祭式が組み立てられる。なお、バラモンのみで挙行されるサットラ (*sattrá-*) は、ソーマとサーマンの使用から、祭式文献ではソーマ祭の中に分類されているが、別の起源に由来するものと推測される (→7.2.)。

ソーマがいかなる植物であるかを巡っては議論があるが、結論的には *ephedra* (麻黄) と考えてよいと思われる。より古い時代の「気付け薬」蜜酒 (*mádhu-*, **médʰu-* ~ 蜜 [**mjēt*]) に代わって、インドイラン共通時代に接触した他文化から移入された興奮剤である。祭官・詩人が興奮・恍惚状態で「ものを見た」といわれることは (→2.), ソーマ服用と関係があろう。武人が戦闘に使用したことも想像に難くない。(現実に第二次大戦では *ephedra* (麻黄) の有効成分 *ephedrin* の合成化合物 *amphetamine* が軍人の戦闘能力を高めるために米空軍によって使用された。対するドイツ空軍は気付け薬に蜜酒を用いたと聞く。)

7.2. サットラ (*sattrá-*)

整備された祭式体系では12日ないし13日以上続くソーマ祭に分類されるが、通常の祭式 *yajñá-* とは本質的に異なる性格を持ち、動詞も *yaj* ではなく「座る」、「座っている」が用いられる (*sattrám sīdati, āste*, さらに *upa-i* 「に入る、加わる」。打ち上げるときは「立ち上がる」*ud-sthā* が用いられる。PW s.v. の記述は正確で参照するに足る)。バラモンのみが参加し、祭官が交代で祭主の役割を務め、ダクシナーも無い。*sattrá-* 「座ること」という名称が示すように、バラモン達が集まり座ってソーマを共に飲みサーマンを朗詠しながら祭官詩人 (*kavī-*, →2.) としての能力を高め合う練成会宿 “*session*,

Sitzung” が出発点であったと推測される (讃歌作成、祭式議論 [*brahmodya*] などを通じての情報交換)。基本形は12 (ないし13) 日間続くが、丸一年、或いは12年続く型もある。「太陽の運行に関する学」が基礎にあり、12という数は一年の月の数を、13は13番目の月「閏月」を指し、従って12ないし13日間は丸一年 *samvatsarā-* (原義は「仔牛が発生から成牛になるまでの [実際には次の仔牛が生まれるまでの] 全期間」) に等しく、更に *samvatsarā-* は「永遠」を象徴すると解釈される。1年間続く *gavāmayana-* 「牛の行程」には冬至と夏至を初めとする太陽の運行に関わる様々な儀礼が組み込まれている。更に、*Sarasvatī* 河を源泉まで遡る *sārasvatā-* や *sarpasattra-* 「蛇のサットラ」等、特殊なサットラも知られている。

7.3. 動物犠牲祭 (*paśubandhā-*)

整備された祭式文献では独立のジャンルを構成せず、ソーマ祭の中に組み込まれた犠牲祭を抽出したものとして (*nirūḍhapaśubandha-*, ŚrSū. +), しかも穀物祭 (*īṣṭi-*, *haviryajñá-*) の枠の中に分類されて (これと整合性をもたせた形で) 記述されている。犠牲獣には一般に山羊、羊、更に牛、特別な場合に馬などが用いられるが (4種の列挙 RV X 91,14), 人を加えて5種という場合もある (TS, TB, ŚB, cf. SCHWAB, p. XVII)。古いヤジュルヴェーダ散文には、「7種の村落に属する犠牲獣 *paśu*」として、人、馬、牛、山羊、羊、大麦、米 (MS I 8,1:116,5), ないし、牛、馬、騾馬、驢馬、山羊、羊、人 (I 5,10:78,6) が挙げられる。動物犠牲祭が古い起源を持つことはRVからも知られるが、犠牲獣と穀物とを併置するこの列挙は、後に動物犠牲祭が穀物祭の中に分類されること (「*Haviryajña*」, →7.), 独立した動物犠牲祭が記述されていないこと、などを考え合わせると、動物犠牲忌避の傾向が既に始まっていることを示すといえるかもしれない。犠牲獣を意味する *paśu-*, *paśú-* は「動物、家畜、犠牲獣」を意味し、ラテン語 *pecū n.*,

pecus f.「家畜」, ゴート語 *faihu* n.「家畜, 山羊, 羊, 貨幣, 財産」, 古高ドイツ語 *fihu* = ドイツ語 *Vieh*, リトアニア語 *pėkus*「家畜」などと同一起源である。式次第のあらましについては → 15。

7.4. 穀物祭

iṣṭi- の語は RV 以来普通であるが (1.1., 5.4. をも参照), 祭式の術語として「穀物祭」を意味する用例がある。*haviryajñā-* (Br. +) とよばれる。*purodās(a)-*「捧げ物」と呼ばれる大麦 (RV +), 米 (AV +) から作ったパンケーキ (日常語ではアプーパ *apūpā-*) や乳製品, 大麦または米の粥 (*carū-*「鍋」と呼ばれる; 粥は日常語では *odanā-*) などを供物とする比較的単純な祭式である。ソーマ祭, 動物犠牲祭の中にも必ず組み込まれている。犠牲獣 (*pásu-*, *paśú-*) と同じく神格に捧げる部分 (*daivatāni*) を切り取って *Āhavanīya-* 祭火の中に献供する。乳製品は供物として以外にも, 道具や指などに塗る, 等に用いられる。新月祭, 満月祭を標準に整備された。太陰暦と太陽暦とを併用する古代インドの生活に即して, アグニホートラ, 新・満月祭, チャートウルマースヤ等, 日・月・季節・年の巡りの維持に関する儀礼が中心である。農作物 (米, 麦等) の収穫に際して初物を供えるアグラヤナは新月祭満月祭に付随して行われる。

穀物祭の基本とされる新月祭・満月祭 (*darśapūrnamāsā-*) は祭主夫妻および4名の祭官により執行され, ダクシナー (→ 1.3.) は南側の祭火で調理される「ふるまい粥」(*anvāhāryā-*, → 7.) である。朔と望の夜を祭火小屋で謹慎して過ごし (*upavasatha*, → 4.), 翌朝, インドラとアグニ (新月祭) ないしソーマとアグニ (満月祭) に上記のパンケーキを献供する。新月祭ではパンケーキの替わりに前日に用意した酸乳と当日搾乳した乳の混合 (*sāmnāyā-*) を Indra に献供する方式があり, 後者が原型であった可能性が指摘されてい

る (西村直子『放牧と敷き草刈り - Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究 -』東北大学出版会 2006, 40 参照)。供物から取り分けられ溶かしバターを注がれた *idā-*「滋養」と称される食物は, 神格としての *idā-* (大洪水の後, 生き残った Manu の乳製品献供から生じたとブラーフマナに語られる) を呼び寄せて, 祭官たちと祭主とが食する。新月祭の前日の午後には, 祭主の三代にわたる祖霊に団子を捧げる Piṇḍapitṛyajña が挙行され, この時には聖索を逆方向に掛ける (→ 4.)。

毎日, 日の出と日の入りに熱した牛乳を, 最初は簡単な祭詞とともに, 次は沈黙して, 祭火に献ずるアグニホートラは, 最も単純なシュラウタ祭式であり, 一人の祭官のみで行われる。古層ブラーフマナの記述からは, 本来はバラモンである祭主が自ら献供したことが窺われ (SAKAMOTO-GOTŌ, Junko, *kathām-katham agnihotrām juhutha*, *Anusatyai*, Fs. Narten, 2000 [2001], 243 n.36 参照), 王族である祭主には禁止・制限される (代替にバラモンへの供食ないし後述の *Agnypasthāna* が勧められる (阪本 (後藤) 純子「王族と *Agnihotra*」*印度学仏教学研究* 53-2, 2005, 947-941 参照, → 2.1.))。リグヴェーダに見られる太陽 (の運行) に関する儀礼と火に関する儀礼とを複合して構成したものと推測される。祭詞 (学派により異同がある) は単純で光 (*jyōtiṣ-*) を媒介項とする火と太陽の同一化を端的に示すが, 奇妙なことにマントラ集成に記載されていない。アグニホートラに続き (MS では夜・朝とも, 他文献では夜のみ), 献供用祭火の傍らに立ち多数の複雑な祭詞 (リチ *ṛc-* から成る) を語りかけて敬意を表する (*Agnypasthāna*)。この儀礼は祭式と認められていないにもかかわらず, 用いる祭詞はマントラ集に収録されている。両者ともに祭火設置者の終生の義務である。Agnihotra と *Agnypasthāna* の相互補完的な密接な関係を考慮すると, 両者は本来一対の拝火儀礼を構成していた可能性がある。少なくともインドイラン

共通起源に遡ると考えられる火を崇拜する祭式が、それを構成する2側面、供物を献ずる儀礼 Agnihotra「火への献供」とことばで讃える儀礼 Agnyupasthāna「火への表敬」に分化され、更に前者が太陽崇拜儀礼と結合し、その際に火と太陽を光に等置する祭詞が付与されたかと推測される（阪本（後藤）純子「王族と Agnihotra」印度学仏教学研究 53-2, 2005, 944, 942 n.1, 941 n.9 参照）。Agnypasthāna に占める RV 讃歌の（従つてもともとホートリ祭官の）役割、Agnihotra が献注儀礼であること（整備された祭式ではアドヴァリュ祭官の担当）という差異にも注目する必要がある。

チャートウルマースヤ祭（Cāturmāsyaṅi）は1年間にわたり4ヶ月毎の満月に繰り返される穀物祭で、第1祭の Vaiśvadeva（一切神たちへの祭り）が新年（新春）に、第2祭の Varuṇapraghāsa（ヴァルウナ神の食べ始め）が夏（雨期の始まり）に、第3祭の Sākamedha（共に栄える祭り）が秋に対応することから、一般に「季節祭」と解されている。名称自体は数詞限定複合語 caturmāsa-「4ヶ月間」からの派生語で、各祭の終了時に祭主が髪を切り（nivārtana-）、特別な誓戒（vrata-）を次の祭式までの4ヶ月間遵守する（→4.）ことに由来す

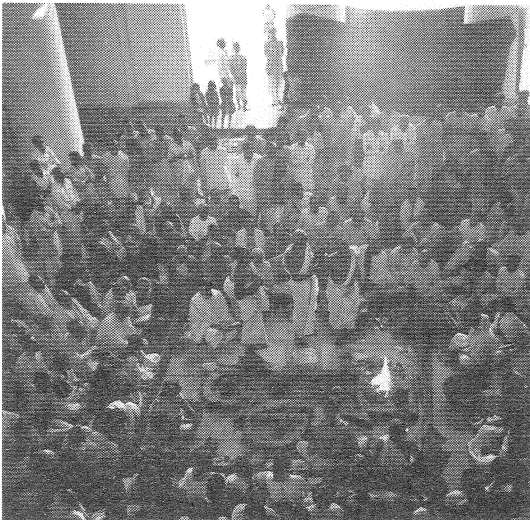
ると思われる：cāturmāsyaṅi [vrataṅi]「4ヶ月間継続する〔誓戒〕」。本来は、上記3祭から構成されていたが、太陽暦の1年は12の太陰月と13番目の閏月から成るので、第4祭 Śunāsīrya（祝福と鋤の祭り）が年末に付け加えられたものと推測される。第3の Sākamedha 祭は本来は Kārttika 月の満月（B.C. 2000 以前の古代文明においては秋分に対応し、新年とされていた可能性が強い）に挙行されていたと推定されるが、大規模な祖霊祭（Mahāpitṛyajña）を伴い（毎月の祖霊祭は新月祭に付属する）、その前夜は通常の祭式中の禁欲生活と異なり、饗宴が催される。仏典の沙門果経はこの祭式の満月の夜を舞台として成立している（阪本（後藤）純子「沙門果経とヴェーダ祭式」印度学仏教学研究 49-2, 2001, 958-953, 特に 957-956 参照）。

7.5. 研究文献

シュラウタ祭式に関する主な研究、翻訳、概説を挙げる。

7.5.1. 祭式全般の概説

WEBER, A., Zur Kenntniss des vedischen Opferrituals, *Indische Studien* X (1868) 321-396, XIII (1873) 217-292.



Sanskrit College Calcutta, March 1958 (Gustav, Helga ROTH 夫妻から K. L. JANERT に送られた写真から)

HILLEBRANDT, A., *Ritual-Litteratur. Vedische Opfer und Zauber*. 1897.

KANE, P. V., *History of Dharmaśāstra*. I–V, 1930–1962, (1968–1975).

GONDA, J., *Die Religionen Indiens I* (1978) 104–173.

Cf. HEESTERMAN, J. C., *The Broken World of Sacrifice. An Essay in Ancient Indian Ritual*. Chicago & London 1993.

7.5.2. 個別の祭式の記述を中心とするもの

新月祭, 満月祭 (Darśapūrnamāsa):

HILLEBRANDT, A., *Das altindische Neu- und Vollmondsopfer. In seiner einfachsten Form. Mit Benutzung handschriftlicher Quellen dargestellt*. Jena 1879.

RUSTAGI, Urmila, *Darśapūrnamāsa. A comparative ritualistic study*. Delhi 1981.

Cf. 西村直子『放牧と敷き草刈り – Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究 –』東北大学出版会 2006.

Cf. 野田智子『Āpastamba Śrautasūtra に記述される Darśapūrnamāsa の研究』(1994 年度京都大学修士論文)

Cf. (Pavitreṣṭi) TACHIKAWA, Musashi–BAHULKAR, Shrikant–KOLHATKAR, Madhavi, *Indian Fire Ritual*. Delhi 2001.

団子祖霊祭 (新月祭に含まれる, Piṇḍapitryajña):

DONNER, O., *Piṇḍapitryajna, das manenopfer mit klößen bei den Indern. Abhandlung aus dem Vedischen ritual*. Berlin 1870.

シュラウタ祭火設置祭 (Agnyādheya):

KRICK, H., *Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya)*. Wien 1982. — (イタリック)

アグニホートラ (Agnihotra):

DUMONT, P.-É., *L'Agnihotra. Description de l'agnihotra dans le ritual védique d'après les Śrautasūtras de Kātyāyana (Yajurveda blanc); Āpastamba, Hiranyakeśin, Baudhāyana, Manu (Yajurveda noir); Āśvalāyana, Śāṅkhāyana (Ṛgveda); et le Vaitāna-Sūtra (Atharvaveda)*.

Baltimore 1939.

BODEWITZ, H. W., *The Daily Evening and Morning Offering (Agnihotra) according to the Brāhmaṇas*. Leiden 1976.

Cf. NAVATHE, P. D., *Agnihotra of the Kāṭha Śākhā [Kāṭhaka Saṁhitā 6.1–9; 7.1–11] with introduction, text, translation and notes*. Pune 1980.

Cf. 阪本(後藤)純子「王族と Agnihotra」印度学仏教学研究 53-2, 2005, 947–941: 「究極の Agnihotra (1) – Vādhūla-Anvākhāna II 13 –」

印度学仏教学研究 55-2, 2007, 804–796: 「究極の Agnihotra (2) – ŚB-M XI 3,1, ŚB-K III 1,4, JB I 19f., Vādhūla-Anvākhāna II 13 –」

印度学宗教学会『論集』34 (印刷中): [Janaka 王の五火説] SAKAMOTO-GOTO, Junko, Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka, *Kultur, Recht und Politik in muslimischen Gesellschaften. Norm und Abweichung, Akten des 27. Deutschen Orientalistentages Bonn 1998, 2001*, 157–167; *kathām-katham agnihotrām juhutha – Janakas*

Trickfrage in ŚB XI 6,2,1 – , *Anusantatyai, Fs. Narten*, MSS Beiheft 19, 2000 [2001], 231–252 .

四ヶ月祭 (季節祭「四ヶ月間の vrata たち」, Cāturmāsya):

EINOO, Shingo, *Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und Śrautasūtras*. Tokyo 1988.

Cf. BHIDE, V. V., *The Cāturmāsya Sacrifices [With special reference to the Hiranyakeśi Śrautasūtra]*. Pune 1979.

Cf. (Sākamedha と Mahāpitryajña): 阪本(後藤)純子「沙門果経とヴェーダ祭式」印度学仏教学研究 49-2, 2001, 958–953.

願望穀物祭 (Kāmyeṣṭi):

CALAND, W., *Altindische Zauberei. Darstellung der altindischen „Wunschopfer“*. Amsterdam 1908 (Wiesbaden 1968). (イタリック)

動物犠牲祭 (Paśubandha):

SCHWAB, Julius, *Das altindische Thieropfer*.

Erlangen 1886.

Cf. 辻直四郎『ブラーフマナとシュラウタ
スートラとの関係』東京 1952.

ソーマ祭 (Agniṣṭoma):

CAIAND, W.-HENRY, V., *L'Agniṣṭoma. Description
complète de la forme normale du sacrifice de Soma
dans le culte védique*. 2 tomes. Paris 1906, 1907.

Cf. Bodewitz, H. W., *The Jyotiṣṭoma Ritual.
Jaiminīya Brāhmaṇa I*, 66-364. Leiden-New York-
København-Köln 1990.

アシュヴァメーダ (馬 祠 祭, 馬 犠 牲 祭,
Aśvamedha):

DUMONT, P.-É., *L'Aśvamedha. Description du
sacrifice solennel du cheval dans le culte védique*.
Paris 1927.

Cf. BHAVE, Shrikrishna, *Die Yajus' des Aśvamedha*.
Stuttgart 1939.

ラージャスーヤ (王即位祭, Rājasūya):

WEBER, A., *Über die Königsweihe, den Rājasūya*.
Berlin 1893.

HEESTERMAN, J. C., *The Ancient Indian Royal
Consecration. The Rājasūya described according
to the Yajus texts and annotated*. 's-Gravenhage
1957.

アグニチャヤナ (火壇設置祭, Agnicayana):

STAAL, Frits, *Agni. The Vedic Ritual of the Fire
Altar*. 2 vols., Berkeley 1983 (Delhi 1986).

Cf. IKARI, Yasuke (井 狩 弥 介), *Baudhāyana
Śrautasūtra X on the Agnicayana, an annotated
translation, Agni, Vol. II*, 478-675.

サウトラーマニー (Sautrāmaṇī):

KOLHATKAR, Madhavi Bhaskar, *Surā. The Vedic
liquor and the Vedic sacrifice*. New Delhi 1999.

ヴァージャペーヤ (戦車競走ソーマ祭, Vājapeya):

WEBER, A., *Über den Vājapeya*. Berlin 1892.
The Śrauta Ritual and the Vājapeya Sacrifice. The
Vājapeya Performance Committee, Poona 1955
(1955年5月8日-1956年5月29日に挙行
されたV祭の企画パンフレット, 60頁+図
表). *Report*. Vājapeya Performance Committee,

Poona 1957. (同報告書, 48頁+写真)

Cf. STEINER, Karin, *Text zum Vājapeya-Ritual*,
Marburg 2004.

ブラヴァルギヤ (ソーマ祭に組み込まれた拝火
儀礼, Pravargya):

VAN BUITENEN, J. A. B., *The Pravargya. An ancient
Indian iconic ritual described and annotated*. Poona
1968.

Cf. HOUBEN, Jan E. M., *The Pravargya Brāhmaṇa
of the Taittirīya Āraṇyaka. An ancient commentary
on the Pravargya ritual. Introduction, translation
and notes*. Delhi 1991; *The Ritual Pragmatics
of a Vedic Hymn: The "Riddle Hymn" and the
Pravargya Ritual (JAOS 120, 2000, 499-536) 504ff.*

サットラ (Sattra):

Cf. TSUCHIDA, R., *Das sattra-Kapitel des
Jaiminīya-Brāhmaṇa (2, 334-370) nach den
Handschriften herausgegeben, ins Deutsche
übersetzt und erklärt*. Dissertation Marburg 1979.

さらに, FALK, Harry, *ZDMG Supplement VI*
(1985) 275-281, KRICK *Agnyaḍheya* 497f. (ほ
か, Index 参照) など。

祭式中のあるトピックを扱ったもの, その他:

潔斎 (ソーマ祭に含まれる Dikṣā):

LINDNER, Bruno, *Die Dikṣhā oder Weihe für das
Somaopfer*. Habilitationsschrift Leipzig 1878.

聖と俗を区別するシンボルとしての髪と髭の取
り扱い:

阪本 (後藤) 純子「髪と鬚」, 『仏教における
聖と俗』日本仏教学会年報 59, 1994, 77-
90.

祭式と来世:

阪本 (後藤) 純子, 「iṣṭā-pūrtā-『祭式と布施
の効力』と来世」, 『今西順吉教授還暦記念
論集 インド思想と仏教文化』, 春秋社 1996,
882-862; SAKAMOTO-GOTŌ, Junko, *Das Jenseits
und iṣṭā-pūrtā- "die Wirkung des Geopferten-
und-Geschenkten" in der vedischen Religion,
Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik*,

Wiesbaden 2000, 475-490.

マイトラーヴァルウナ祭官について:

MINKOWSKI, Christopher Z., *Priesthood in Ancient India. A Study of the Maitrāvaruṇa priest*. Vienna 1991.

サーマンに関して:

VAN DER HOOGT, J. M., *The Vedic Chant Studied in its Textual and Melodic Form*. Proefschrift Amsterdam 1929.

FADDEGON, Barend, *Studies on the Sāmaveda*. Part I., Verhandelingen, Amsterdam 1951 (1963).

STAAL, J. F., *Nambudiri Veda Recitation*. 's-Gravenhage 1961.

HOWARD, Wayne, *The Decipherment of the Sāmavedic Notation of the Jaiminīyas*. Studia Orientalia 63, Helsinki 1988.

TARLEKAR, G. H., *Sāman Chants: In Theory and Present Practice* (with a Cassette of Sāman Chants). Delhi 1995.

7.5.3. 辞書

RENOU, L., *Vocabulaire du rituel védique*. Paris 1954.

SEN, Chitrabhanu, *A Dictionary of the Vedic Rituals. Based on the Śrauta and Gr̥hya Sūtras*. 1978 (reprint Delhi 1982 +).

MYLIUS, Klaus, *Wörterbuch des altindischen Rituals. Mit einer Übersicht über das altindische Opferritual und einem Plan der Opferstätte*. Wichtrach 1995. (*Das altindische Opfer* [→ 7.5.7], 574-588 に補遺あり。)

RANADE, H. D., *Illustrated Dictionary of Vedic Rituals*. New Delhi 2006.

BÖHTLINGK, Otto-ROTH, Rudolph, *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 Bde. St. Petersburg 1855-1875. [PW] (br., 祭式に関連する語彙については A. WEBER が担当。)

7.5.4. 祭式道具

RAGHU VIRA, *Implements and Vessels used in Vedic*

Sacrifice, JRAS 1934, 283-305 (= *Vedic Studies*, New Delhi 1981, 41-66).

CALAND-HENRY, *L'Agniṣṭoma*, pp. 253-256, Planches I-III. (Pit Rivers Museum Collection からの写真 Pl. II が誤って Pl. III の反転したものになっている。SEN, *Dictionary* に収録されたものを見る必要がある。)

SEN, Chitrabhanu, *A Dictionary of the Vedic Rituals, Appendices*.

DHARMADHIKARI, T. N., *Yajñāyudhāni*. Pune 1989.

STAAL, Frits, *Agni*, Vol. 1.

The Śrauta Ritual and the Vājapeya Sacrifice, 最終頁, *Vājapeya Committee, Report*, p. 43.

RANADE, H. G., *Kātyāyana Śrauta Sūtra [Rules for the Vedic sacrifices] (Translated into English)*. Poona 1978, p. 447 の後.

Shrimad-Vajasaneysi-Madhyandin-Shatpath-Brahmanam with Vedarthaprakash commentary... Part I, Kalyan-Bombay 1940, "Dharśapūrṇamāsādi-yajñopayuktapatrāṇi" (1)-(4)

VAN BUITENEN, *Pravargya*, p. 49 の後, Plate 3.

RANADE, *Dictionary* の該当項目.

7.5.5. 祭場のプラン

KULKARNI, R. P., *Layout for different Sacrifices. According to different Śrauta Sūtras*. Ujjain 1997.

CALAND-HENRY, *L'Agniṣṭoma*, pp. 257, Planches IV.

SEN, Chitrabhanu, *A Dictionary of the Vedic Rituals, Appendices*.

PARPOLA, Asko, *The Śrautasūtra of Lāṭyāyana and Drāhyāyana and their commentaries. An English translation and study*, Vol. I: 2, Helsinki-Helsingfors 1969, pp. 16-18.

The Śrauta Ritual and the Vājapeya Sacrifice, 1955, 最終頁綴じ込み, *Vājapeya Committee, Report*, 1957, p. 42.

MYLIUS, *Wörterbuch*, pp. 145-147.

MINKOWSKI, *Priesthood*, pp. 13-15.

RANADE, H. G., *Kātyāyana Śrauta Sūtra [Rules for the Vedic sacrifices] (Translated into English)*. Poona

36

Layout for Different Sacrifices

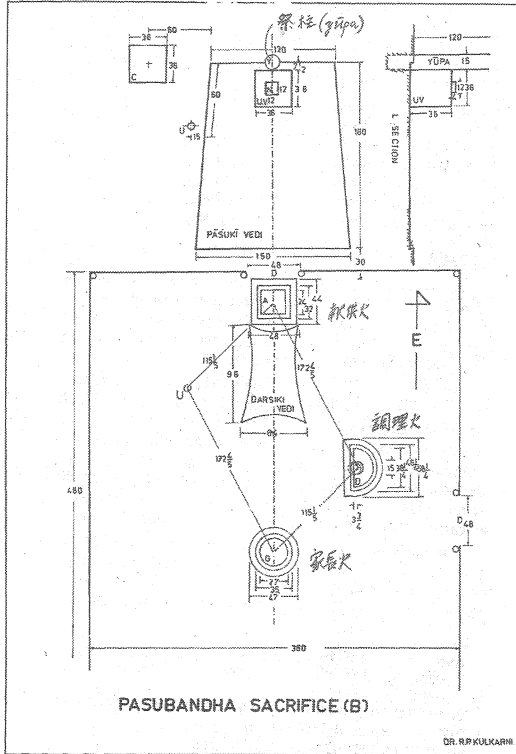


PLATE 2 (B) (Scale 0.24 mm = 1 Aṅg)

同，動物犠牲祭用祭場図：Baudhāyana 派。

1978, p. 447 の後。

HAUG, Martin, *Aitareya Brahmanam of the Rigveda*, Vol. 1, 1863, 巻頭の綴じ込み。STAAL, Frits, *Agni*, Vol. 1 (アグニチャヤナ)。HILLEBRANDT, *Neu- und Vollmondsopfer*, p. 191 (新月祭, 満月祭)。VAN BUITENEN, *Pravargya*, p. 12 の後, Plate 2 (プラヴァルギヤ)。RANADE, *Dictionary*, 333-348.

7.5.6. 現代における再現写真

RANADE, H. G., *Kātyāyana Śrauta Sūtra*, TACHIKAWA et al., *Indian Fire Ritual (Pavitreṣṭi)*, STAAL, *Agni*, Vol. 1 (アグニチャヤナ), VAN BUITENEN, *Pravargya* (プラヴァルギヤ), *Vājapeya Committee, Report*, 1957 (ヴァージャペーヤ) に写真が収められている。その他, ヴァージャペーヤ, 満月祭の CD-Rom, アグニチャヤナの Video など幾つか

The Layout of the Soma Sacrifices (Aniṣṭoma)

49

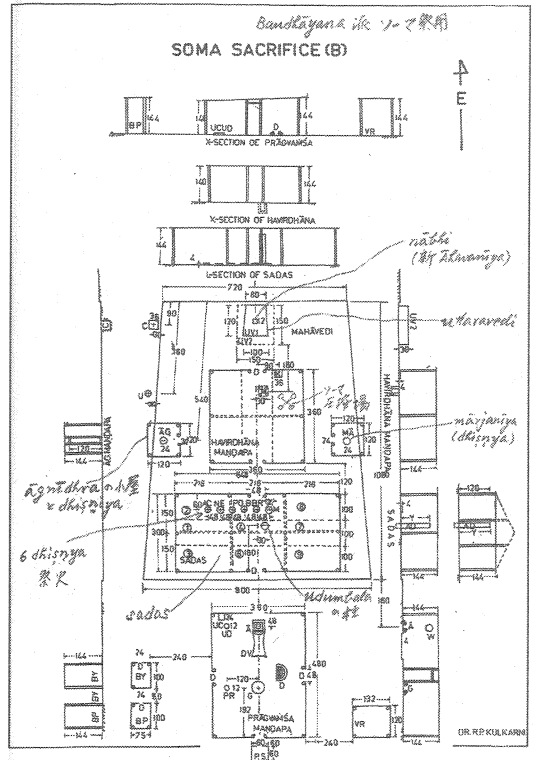


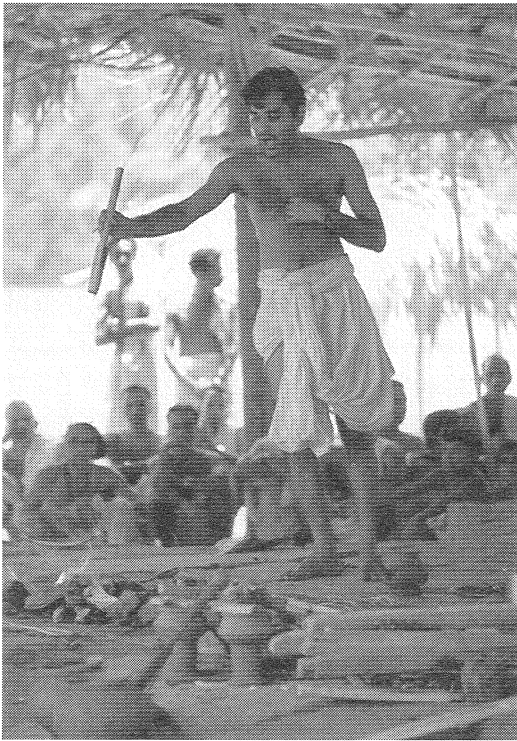
PLATE 5 (B) Soma Sacrifice (Scale 0.24 mm = 1 Aṅg)

同，ソーマ祭用祭場図：Baudhāyana 派。

の映像を見ることができる。STAUSBERG, Michael, *Die Religion Zarathushtras. Geschichte-Gegenwart-Rituale*, Stuttgart 2002-2004 にはゾロアスター教祭式の DVD, 写真が付せられている。

7.5.7. 祭式関連原典の翻訳など

KEITH による *Taittirīya-Saṁhitā*, *Aitareya-Bṛāhṁaṇa*, *Kauṣītaki-Bṛāhṁaṇa*, EGGELING による *Śatapatha-Bṛāhṁaṇa*, P.-É.DUMONT による *Taittirīya-Bṛāhṁaṇa* (III はテキスト付全訳, I, II は一部), Kyōko SAKAMOTO (AMANO) による *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II* の *brāhṁaṇa* 部分 (Diss. Freiburg 2001), CALAND による *Pañcaviṁśa-Bṛāhṁaṇa*, *Āpastamba-Śrautasūtra*, *Śāṅkhāyana-Śrautasūtra*, VAN GELDER による *Mānava-Śrautasūtra*, RANADE による *Kātyāyana-Śrautasūtra*, *Āśvalāyana-Śrautasūtra*, *Lāṭyāyana-Śrautasūtra*, MYLIUS による *Āśvalāyana-Śrautasūtra*, KASHIKAR による



STAAL, *Agni I*, p. 561: アグニチャヤナ祭, アドヴァルユによる積み上げられたアグニ火壇への献供 (pūṁhuti)。

Baudhāyana-Śrautasūtra (Śrautakośa 中にもあり), THITE による Āpastamba-Śrautasūtra, PARPOLA による Lāṭyāyana-Śrautasūtra (一部) などがある。上掲 7.4.2. の研究書の中にも訳を含むものがある。

祭式の手順を正確に追うためには、特に、CALAND の Āpastamba-Śrautasūtra の訳と注 (Göttingen-Leipzig 1921, Amsterdam 1924, 1928) が欠かせない。一種の資料集として、Śrautakośa. *Encyclopaedia of Vedic sacrificial ritual comprising the two complementary sections, namely the Sanskrit section and the English section*. C. G. KASHIKAR Editor-in-charge; English section by R. N. DANDEKAR, Poona 1958-) がある。

重要な論文集に、CALAND, *Kleine Schriften* (Herausgegeben von Michael Witzel. Stuttgart 1990) がある。HILLEBRANDT, *Kleine Schriften* (Stuttgart 1987), MYLIUS, *Das altindische Opfer. Ausgewählte Aufsätze und Rezensionen* (Wichtrach

2000), HEESTERMAN, *The Broken World* (→ 7.4.1.), MALAMOUD, *Cooking the World. Ritual & Thought in Ancient India* (Oxford University Press 1996), GONDA の一連の著作なども参考になろう。より広い文脈では KUIPER, *Ancient Indian Cosmogony* (Delhi 1983) も時に刺激となりうるかも知れない。ヴェーダ散文の原典研究には、OERTEL, Hanns, *Kleine Schriften* (Hrg. von H. Hettrich und Th. Oberlies. Stuttgart 1994) などが欠かせない。

ヤジュルヴェーダ文献概観に辻直四郎『現存ヤジュルヴェーダ文献』(東洋文庫 1970), シュラウターストラ概観に KASHIKAR, *A Survey of the Śrautasūtras* (Journal of the University of Bombay, Vol. XXXV, New Series, Part 2. Bombay 1968) が便利である。辻直四郎には「現存 Sāmaveda 文献の概観 (Saṁhitā 篇)」(慶應義塾大学語学研究所『語学論叢』第 1 輯, 1948, 『著作集』第 1 巻 317-344 に再録)もある。Jaiminīya 派のサーマヴェーダ概観に PARPOLA, *The Literature and Study of the Jaiminīya Sāmaveda. In retrospect and prospect*, *Studia Orientalia* 43: 6, Helsinki 1973 が ある。RENOU, *Les écoles védiques et la formation du Veda* (Paris 1947) はヴェーダ学派全般の理解の出発点になる。

研究論文の探索には、RENOU, *Bibliographie védique* (Paris 1931), DANDEKAR ほかに よる *Vedic Bibliography* (Bombay 1946-, 現在までに 6 巻が刊行) が利用できる。語彙索引には VISHVA BANDHU ŚĀSTRĪ, *Vaidika-Padānukrama-Koṣaḥ. A Vedic Word-Concordance. I-IV* (Lahore, Hoshiarpur, 1935-1973) がある。

8. グリヒヤ (Gṛhya 「家庭の」) 祭式

基本は pākayajña 「調理祭」と呼ばれる。家長の一生に伴う saṁskāra- (「(ātman- を) 諸要素を統合して作り上げること」, 『行』, 一般に「入門式」と訳される) を中心に構成されている。家庭内の祭火を用い, 家長または依頼されたバラモンにより, また妻により, 時に家族によって執り行われる。グリヒヤストラの内容

を HILLEBRANDT (→ 7.4.1.) に依って列挙すれば以下のような構成になる:

男児誕生祈願 - 流産防止 - 「畝引き」 - お産 - 産褥 - 誕生 - 命名 - 誕生日 - 妻の復帰 - 月礼拝 - 初外出 (父が太陽を見せる) - 食べ初め - 髪結い - 耳ほじくり - 髭剃り (Keśānta, Godāna) - 入門 - 学習開始 (Sāvitrī) - 学生生活 - 学習 - 誓戒 - 学期始め - 休暇 - 学期終了 - 第二学期 - Veda 学習期 - 卒業 (: Snātaka 「既沐浴者」になる) - Snātaka の義務 - 結婚 - 家長の火 - 祭式執行資格者 - 家長の義務としての祭式: - 祭式材料について - バター (ājya, ghṛta) を用いた祭式 - 調理祭 - 動物犠牲祭 - 祭式の刻限について - 規則的祭式, 毎日の祭式 - 新月祭・満月祭 (大家長 = 部族長の Śrauta 祭としてのそれに対し, 一般家長の儀礼) - 春の Caitra 月の祭式 - 雨期の Śrāvaṇa 月の満月祭 - Indra 祭 - Āśvina 祭 (秋の満月祭 + 大祖霊祭) - Āgrahāyaṇī 祭 (Pratyavarohaṇa, 旧正月祭) - 臨時祭, 賓客接待儀礼 - 家事・畜産・農耕儀礼 - Caitya (偉人の墓?) に対する儀礼: - 病氣・死亡 (antyeṣṭi)・葬礼 (Pitṛmedha) - 祖霊祭 (Śrāddha 「信心祭」)。

参考文献には, 俯瞰的な HILLEBRANDT, *Ritual-Litteratur*, 41-97 (→ 7.4.1.), KANE, *History of Dharmasāstra* (→ 7.4.1.), GONDA, *Vedic Ritual* (Leiden, 1980) がある。永ノ尾信悟「グリフヤーストラ文献にみられる儀礼変容」東洋文化研究所紀要 118 (1992) 43-86, には GṛSū. の総目次が収められている。

個別的な研究に, SPEIJER, J. S., *Ceremonia apud Indos, quae vocatur jātakarma*, Leiden 1872 (誕生儀礼), WINTERNITZ, M., *Das altindische Hochzeitsrituell nach dem Āpastambīya-Grhyasūtra und einigen anderen verwandten Werken. Mit Vergleichung der Hochzeitsgebräuche bei den übrigen indogermanischen Völkern*, Wien 1892 (婚姻儀礼), 辻直四郎「古代インドの婚姻儀式」『ヴェーダ学論集』, 岩波書店 1977, 282-329, 高橋明による一連の論文 (印度学仏教

学研究ほか) がある。翻訳には, OLDENBERG, *Gṛhya-sūtras. Rules of Vedic domestic ceremonies* (The Sacred Books of the East 29, 30) 1886, 1892 に 7 つの GṛSū. の英訳が収められている。OLDENBERG は *Indische Studien* XV (1879) 1-166 に Śāṅkhāyana-Śrautasūtra の独訳 (および原典) を載せている。STENZLER, *Indische Hausregeln*, I, 2 (Abh.f.d.Kunde d. Morgenlandes 4-1) 1865 は Āśvalāyana-Grhyasūtra のドイツ語訳である。この文献紹介からも知られるとおり, グリヒヤ文献は 19 世紀後半に注目されていたが, その後の研究は少なくなっている。最近では, 永ノ尾信悟がヒンドゥー儀礼の展開を視野に論文を発表しているのが注目される。

9. 葬礼, 祖霊祭

RV, AV に既に葬礼, 祖霊祭用の讃歌 (“Yamasūkta”) があるが, YV-Br., ŚrSū. には新月祭時の団子祖霊祭 (Piṇḍapitṛyajña), Cāturmāsya 祭中の大祖霊祭 (Mahāpitṛyajña, 秋分頃の満月の日の午後) が規定されるのみである。しかし, これらの文献や Up. に言及される「一切神」(Viśve Devāḥ) への儀礼, ダイヴァ (dāiva-, daivá-) と呼ばれるものなども祖霊に関わる可能性がある。葬礼 (Pitṛmedha), 祖霊祭 (Śrāddha 「信心祭」) についての纏まった記載はピトリメーダーストラ (Pitṛmedhasūtra), グリヒヤーストラの補遺 (Grhyaparīśiṣṭa) 等から始まる。法典類 (Dharmasūtra, Dharmasāstra) には独立の章が設けられている。文献への収録編集, ないし認知が遅れただけとも考えられる一方, 土着の風習から導入された要素も多いものと思われる。家長が複数のバラモンほかの客を接待して執り行う。

祭火への献供は行われず, 祖霊 (pitṛ-, 「父」と同語) たちは自分で供物 (団子, 粥) の湯気を食べる。祖霊の食事はスヴァダー (svadhā-) とよばれる。「自分で決めること, 自決権, セルフサービス」の意味である。祖霊に対する儀礼には, シュラウタ祭, グリヒヤ祭で通常用

いられない胡麻が使用される点が注目される。既に RV に見られ、『アヴェスタ』にも対応語(新アヴェスタ語 *gandər̥pa-*) のある「ガンダルヴァ」(*gandharvá-*) は祖霊たちが天界の住人たちに姿を変えたとも思われる。彼らの楽器、音楽、仮面、衣装は、我が国の小正月や、ヨーロッパのカーニバル (Fasching, Fasnacht, 謝肉祭) に見られる、祖霊たちが里に戻ってくる姿を仮装によって再現する冬の行事との関連を示唆する。仏典において、中有の存在をガンダルヴァと呼ぶことも、死後天界に生まれ変わるとされるヴェーダ時代の死後観から理解できる。また、RV 以来、祖霊を天地を往来する太陽光線と同一視する見解が見られる。

死者の世界を司るのはヤマ (Yama, 閻魔) である。『アヴェスタ』の *Yima, Yəma* に当たる。インドイラン共通時代の人類の始祖「曙の息子ヤマ」であり、原義は「双子の(男)子」である。「双子の妹(または姉) Yamī が婚姻を迫る問答讃歌がリグヴェーダに見られる。最初に死んだ者として川を遡って死者の楽園を見出し、その後、困難な道を辿って来る死者たちの「王」となった。二頭の犬、死者の渡る橋などの要素もインドイラン共通時代に遡る。死者の「實在」(*ásu-*) が、生前に積んだ自分の良い行いなどと、死後天界で再会し合体する、という観念も共通時代に遡り、ゾロアスター教の終末論、インドの「業と輪廻」理論の出発点となっている。死者が橋を渡り、そこで選別を受けるとされることは下界、地獄の存在を前提とするが、具体的には殆ど語られることが無い。

参考文献：CALAND, W., *Die altindischen Toten- und Bestattungsgebräuche*. Amsterdam 1896; *Über Totenverehrung bei einigen der Indo-germanischen Völker*. Amsterdam 1888; *Altindischer Ahnencult. Das Çrāddha nach den verschiedenen Schulen mit Benutzung handschriftlicher Quellen dargestellt*. Leiden 1893; 辻直四郎「古代インドの葬送儀式」、『ヴェーダ学論集』330-374; 杉本卓洲『インド仏塔の研究』平楽寺書店 1984, 141-191。

Cf. 中村隆海「祖霊祭 *śrāddha* : インド・ガヤー市の事例報告」, 印度学宗教学会『論集』28(2001) (55)-(80)。

10. プージャー, サットカーラ, バリ

ヒンドゥー教, 仏教, ジャイナ教における儀礼は、ヴェーダ祭式とは異なり、仏典に「供養」と訳される類の神仏への表敬儀礼に移る。ヒンドゥー教における代表的神格は、ヴィシュヌ (*Viṣṇu*), シヴァ (*Śiva*), およびこの両神と関連する女神たち、土地の神々などである。ヴェーダ時代と異なり、神像が大きな役割を果たす。バラモン(あるいは出家者)が毎日あるいは機会に応じて行う。信者が依頼することもある。信者も簡単な日常儀礼を行う。永ノ尾信悟「ヒンドゥー祭祀の形成と展開」(岩波講座『世界歴史』6, 『南アジア世界・南アジア世界の形成と展開』, 1999, 225-244) は「座, 足洗い水, アルギヤ [賓客に差し出す水, 漢訳「阿伽」], 口すすぎ水といった要素は、ヴェーダ文化に古くから伝承されていた賓客接待儀礼からの流用である。これに対し、香木のペースト, 花, 香煙, 灯明などはグリヒヤ・スートラ文献でも比較的新しい部分で、主として祖霊崇拜などにおいて散発的に記述されていたが、神々の礼拝において用いられるようになったのは、グリヒヤ・スートラへの補遺文献においてはじめてであった」(p. 239) と記している。例えば、祖霊祭 (*Śrāddha*) におけるバラモンへの贈り物中に「塗香, 花, 焼香, 灯明, 衣料」が列挙されるのは古い例である: *HirPitṛmSū XVII: 51,13 gandhapuṣpa-dhūpa-dīpa-*°, *ĀśvGrSū IV 7,17 gandhamālyadhūpa-dīpa-āchādanānam pradānam*。この場合、祖霊祭においてバラモンが祖霊の身代わりを務めると考えられる要素、さらに古く、ブラーフマナにおいてバラモンは人間たちの中の神々であるとされ、祭火(「神々の口」)への献供とバラモンへの報酬 (*dakṣiṇā-*, 粥に代表される) とが同価値とされる記述なども思い合わされる。そもそもヴェーダ祭式は神々を賓客と

して接待する形式を取っていたが、プージャー等においては、祭火への献供は行われない（次項のホーマが組み込まれることはある）。祖霊への「お供え」には「与える」*dadāti* という動詞が用いられるが、ヴェーダ祭式において、祭官への報酬 *dákṣiṇā-*, *dāna-* 「布施」に用いられる表現と同じである（*dákṣiṇā-*, *dāna-* も「供養」と訳されることがある）。これらの儀礼の成立に祖霊祭の要素が果たした役割は無視できない。汎インド的展開であり、仏教もその流れの中に位置する。代表的なものは：

プージャー *pūjā-*（語根としては既に RV にある）。仏典で「供養」と訳されるもの代表であるが、「供養」という訳語には多様な原語（数十以上）が対応するので面倒な事態が伏在する。「16 のもてなしから成るプージャー」などに組み立てられ、日々、または機会ごとに行われる。

サットカーラ *satkāra-*, *sat-kar/kr*（ヴェーダ語に無し、Ep. Kl. Pur. +）。「歓待」に当たる。客を丁重にもてなす一連の礼儀である。この語も仏典で「供養」と訳される。

バリ *balí-*（RV 「貢ぎ物、税」+）。鳥獣、餓鬼、神、樹神などへの「お供え、施し」。この語も仏典で「供養」と訳される。

参考文献：永ノ尾信悟上掲書（28ff. には「祭場の変容」が述べられ、*maṇḍapa-*, *kuṇḍa-*, *maṇḍala-* の出現が分析されている）；EINO, Shingo, *The Formation of the Pūjā Ceremony, Still 20* (Festschrift Thieme, 1996) 73–87；KANE 上掲書, GONDA の一連の論文, BÜHNEMANN, Gudrun, *Pūjā. A Study in Smārta Ritual*. Wien 1988 ほか, THIEME *Kl.Schr.* 343ff., 磯田熙文「*pūjā* について」, 藤田宏達博士還暦記念論集『インド哲学と仏教』（1989）555–576, TACHIKAWA, Musashi-HINO, Shōren-DEODHAR, L., *Pūjā & Saṃskāra*, Delhi 2001.

11. タントラ儀礼, ホーマ

タントラ (*tántra-*) の語は、シュラウタ祭式

解釈の伝統では各祭式の本祭部を成り立たせるのに必要な補助的要素（どんな祭式にも共通する「縦糸」）と説明される。「密教」という意味でのタントラは万象の背後を貫いている糸、筋の意味かと思われる（cf. ヴェーダ文献, 仏典における *bāndhu-* 「結びつき」, *nidāna-* 「因縁」, *upaniṣád-* 「ものの背後に位置するもの；関係、根拠」）。

RV 以来、中性名詞 ホーマン (*hóman-*) の語が見られ、ギリシャ語の *k'eūma* に対応する。男性名詞 ホーマ (*hóma-*) は AV 以降現れ、仏典で「護摩」と音写される。*hóma-* はヴェーダ祭式の伝統では一般に *áhuti-* (RV +, = アヴェスタ *āzu'ti-*) と同義語の、より新しい語と考えられているようである。シュラウタ祭の伝統では動物犠牲祭に関する記述中に多く見られる。永ノ尾（上掲書 240ff.）は焚木を祭火に投げ入れることをヒンドゥー儀礼の特色と見、ヴェーダ祭式に見られないものとする。確かに、ヴェーダ祭式文献には焚木そのものを供物と見なす視点は欠けているが、AV のブラフマチャーリン (*Brahmacārin*, ヴェーダ学生, 弟子) の歌には、弟子が夜中に師匠の火を維持する為に 3 本の焚木を投げ、これによって天空地の 3 界を創造するとあり、呪法的役割が見られる。（学生が入門するときには、焚木の持参が求められる。）動物犠牲祭の終わりには、祭柱の削り屑と敷き草とが火中に投ぜられるが (*svarupraharāṇa-* または *svaruhoma-*, cf. 新月祭満月祭の *sūktavāka*)、その行作は、普通、*praharati* 「もたらす」と表現される；しかし最古の MS, KS では *juhoti* 「献供する」と表現されることがある。マイトラーヤニー サンヒターの祭主の章には (MS I 4,11^o:59,7–), 焚き木を第一の献供であるとして、何がその献供における *yājati* の 3 要件 (→ 5.4.) に当たるかを論じる箇所が見られる。これらの中に、（整備されたシュラウタ祭式の中では注目されなくなった）観点があり、タントラ儀礼のホーマに伏流として受け継がれた（または再浮上した）可能性が考えら

れる。シュラウタ祭式研究では顧みられることの少ないアタルヴァヴェーダ系統の呪法を精確に検討する必要もある。『リグヴェーダ』、『アヴェスタ』において、祭火のアスペクト（諸相）を神と同一視することにも（Transsubstantiation, cf. Gorō, *Erlanger Tagung* 150 および注 12), シュラウタ祭式文献よりも、むしろタントラ儀礼を想起させる所がある。ゾロアスター教儀礼をも検討する価値がある。

タントラ儀礼の重要要素には、ほかに、手、指などのジェスチャーにより象徴的呪法を行う「ムドラー」(*mudrā*-, 仏典で「印契」と訳される)、ヴェーダ以来の祭式用詩句（祝詞）を謂う用語である「マントラ」(*mantra*-「真言」)、一種の呪文「ダーラニー」(*dhāraṇī*-, 「陀羅尼」)、灌頂儀礼 (*abhiṣeka*-), ヤントラ (*yantra*-, 図形)、マンドラ (*maṇḍala*-, 曼荼羅)、念想 (*upāsana*-) などがある。身（行い）、口（ことば）、意（考え）を一組で行ずること（三密）は、RV 以来の、そしてゾロアスター教にも見られる考え方（仏教の「三業」）に基づく。

参考文献：引田弘道『ヒンドゥータントリズムの研究』、山喜房仏書林 1997；高島淳「タントリズム」岩波講座東洋思想『インド思想 2』（1988）121-140；MISHRA, Visbhuti Bhushan, *Religious Beliefs and Practices of North India during the Early Mediaeval Period*, 1973 (Handbuch der Orientalistik II, Ergänzungsband 3); GOUDRIAAN, Teun-GUPTA, Sanjukta, *Hindu Tantric and Śākta Literature*, 1981 (History of Indian Literature II-2); BRUNNER, PADOUX, D. H. SMITH, BÜHNEMANN の一連の著作；EINOO, Shingo-TAKASHIMA, Jun, *From Material to Deity. Indian Rituals of Consecration*, New Delhi 2005 (7-49: EINOO, The Formation of Hindu Ritual, 283-312: Bibliography); 森雅秀, 立川武蔵, 津田真一の一連の著作；桜井宗信『インド密教儀礼研究』、法蔵館 1996。

12. シュラウタ祭式の目的など

宇宙と時の巡りの維持：毎日（日没、日昇）

— 新月、満月 — 4ヶ月間 — 一年間 — 新年（夏至、冬至）；耕作（野焼き、初物）。穀物祭 (*iṣṭi*-) 型およびサットラ（特に *Gavāmayana*）に顕著である。*ṛtū*- と *saṃvatsarā*- とがキーワードである。*ṛtū*- の原義は「マクロコスモスにおいてもミクロコスモス（個々の生物）においても時のリズムがびったり合っていること（周期性）」であり、「季節、（女性の）妊娠可能期」等の意味で用いられる。*saṃvatsarā*- 「1年間、仔牛の発生から成牛になるまでの期間」は完全なる円環の達成（=永遠の保証）に意を置いている（後藤敏文「人類と死の起源」佛教文化学会十周年、北條賢三博士古稀記念論文集『インド学諸思想とその周延』、2004, p. (421), (430) n. 23 参照）。— 祭式と時間観念については、cf. DESHPANDE, Maitreyee, *The Concept of Time in the Vedic Ritual*, Delhi 2001.

部族に関わる側面：部族の代表としての個人、支配権の確保と拡大。部族、部族連合から国家、王権へ。これに伴い、アシュヴァメーダ (*Aśvamedha*, 馬犠牲祭)、ラージャスーヤ (*Rājasūya*, 王即位式)、ヴァージャペーヤ (*Vājapeya*, 戦車競技ソーマ祭) などの一年間を要する大規模なソーマ祭が前面に現れる。

個人に関わる側面では、死後の世界の確保：毎晩、毎朝のアグニホートラ (*Agnihotra*) と新月満月祭の継続とが重視され、特にアグニホートラが、その思想的根拠付けの深化とともに普及、「業と輪廻」の理論構築に連なる。大規模ソーマ祭であるアグニチャヤナ (*Agnicayana*, 火壇構築祭) が推奨される。その根拠付けの中から「個人原理アートマン = 宇宙原理ブラフマン」の思想が展開する。個人の繁栄としては、男たち、家畜たち、自分とそれらの子孫、財産の拡大、支配階級の地位確保（「食べる者」となる）、競争相手に打ち勝つ、などが強調される。願望祭（穀物祭の変形）、特別な Soma 祭には呪いの要素が強く見られる。罪を払い落とす目的には、各種の改善儀礼 (*Prāyaścitta*, 「贖罪法」)、サウトラーマニー (*Sautrāmaṇī*), 行作やマントラ

に意義付けによって組み込まれるもの、など多様な側面がある。

祭官の霊力確保や作戦行動には、サットラ (*satrá-*「座り込み、セミナー」→5.2.) とよばれる比較的長期に亘るソーマ祭が営まれた。整備された祭式体系では、祭官だけで順番に祭主の役を務めながら、12日から一年間 (*Gavāmayana-*「牛の〔成長の〕歩み」) の間、多様なソーマ祭の組み合わせによって行われることになっている。これにも、願望用のヴァリエーションがある。

宇宙の構成: 地上に住む人間たちの上に祖霊たちの世界があり (RV では夏の放牧場となる高原が原型とされていた), その上の天界に神々が住むとされる。ガンダルヴァ (*gandharvá-*) たち, アプサラス (*apsarás-*) たちは, 祖霊たちとその女性たちと思われる。おおよそ「地-空-天」に当たるものと考えられる。神々の母が語られる時には「ウルヴァシー」 (*urvāśī-*) とよばれるが, アプサラスの一族である。地上は, 生活空間 (グラーマ *grāma-* とよばれることがあるが, これは厳密には移動生活をする一単位, 定住生活が優勢になって「村落」の意味も現れる。移動生活時代の「定住地」は *vís-*, *kṣéma-*) とアラニヤ (*áranya-*「原野, 荒野, 未開地 (原意は「よその土地」) とから構成される。「天-空-地」の間にもアラニヤがある。神々は地上での生産に依存している。(メソポタミアには, 神々が動物犠牲祭の匂いに蠅のように群がる, という表現があるそうであるが, RV にも, 蜜蜂のように, という表現が見られる。) 後藤敏文「新資料 *Vādhūla-Anvākhyāna* の伝える『*Purūravas* と *Urvaśī*』物語」(『神子上恵生教授頌寿記念論集』, 永田文昌堂 2004, 845-868) p. 859f. 参照。「天-空-地」は, 「バラモン-クシャトリヤ-庶民」に配当されることがある。

契約・友好関係 (*mitrá-*) にある他部族と敵対部族, および潜在的敵対部族との関係には常に注意が払われている。「競争相手, ライ

ヴァル」は「兄弟関係にある者」を原義とする *bhrátrvya-* で表されることが多く, 兄弟間での部族の覇権を巡る争いが関心の中心におかれていた時代を反映する。

13. モティーフと構造, 理論

シュラウタ祭式成立の規範となった社会生活のあり方は, 遊牧と掠奪とに, 定住期を交えたものである。定住期 (*kṣéma-*) には大麦の耕作が行われたことが推定される。祭式道具, 陶器製品, 調理法, その他一切, 昔の生活に基準が採られており, 曾ての生活をなぞるものとなっている。祭場内の移動, 運搬に用いられる用語には, 「入植」 (*adhy-ava-sā*) など, 移動期の用語が用いられる。祭場は東向きに作られ, 祭式は東に向いて行われる。祭火設置祭で *Āhavanīya* 祭火を設置する時には, *Gārhapatyā* 祭火から取った火を捧げ持ち, 馬を先頭として東に進む。進行の途中でダクシナーの贈与が行われ, さらに祭主は祭場の外で車輪を東に転ずる。このような一連の儀礼は, アーリヤの人々の東方への進出を模倣再現するものと見なされる。祭場が *vihāra-*「時を過ごすこと」(仏典の「精舎」と訳される語に同じ) と呼ばれるのもこれと関連するかも知れない。Krick, *Feuergründung* の関連箇所 (まとまって述べられてはいない), 坂本恭子『印度学仏教学研究』45-1 (1996) 487-492, 山田智輝『論集』32 (2005) 102-84, 後藤敏文『印度学仏教学研究』55-2 (2007) 809-805 参照。

太陽光と祭火との同一化に基礎を置く「拝火教」的性格が祭式の中心を形成する。水, 植物, 食物の循環的成立にも注意が払われる。背景には RV 以来のエネルギー循環の理論があり, やがて「5火2道説」へと連なる。一つ一つのマントラ (単語, 音節, 詩節), 行作, 材料を個々の効果結実と結びつけ, 全体をそれらから成る構造物と意味づける。例えば, 各祭式行為 (+ マントラ) によって構築 (*sam-skar/skr*) される死後の自己 (アートマン) の部材について,

伏見誠「祭祀においてつくられる ātman」, インド思想史研究 7, 1995, 36-50 参照。

もともと言葉に祭式の力は置かれている(→ 5.)。呪いと誓いと両面を持つ呪術から組み立てられている。祭式の効力には「知識」が欠かせない。

行作は模倣からなる。例えば、上述の移動期の生活、東方への進出、アグニチャヤナの煉瓦火壇の下に埋められる植物の種、人と家畜たちの頭、黄金の円盤の上に置かれた人型など、「おままごと」的要素が多い。往古本来の生活習慣を模倣することは既に述べた。対象物を崇める時に、対象の回りを右回り(時計方向)に回ったり、松明を右回りに三度回すが、太陽の運行と関連する可能性がある。印欧語族起源の風習であるといわれる: CALAND, W., Een indogermaansch lustratie-gebruik, *Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen*. Afdeling Letterkunde, 4e reeks, deel II, 1898, 275-325 参照。

シュラウタ祭は祭場(→ 7.4.5.)で行われる。vihāra-, devayājaña- などとよばれる。基本となる穀物祭用の建物を śālā-「小屋, ホール」, prācīnavamśa-「東向きの梁をもつもの」, agnisālā-「祭火小屋」, agāram「家」, vimitam「建てられた[家]」などとよぶ。小屋の最西部は仕切られて祭主の妻の小屋(pamīsālā-)となる。祭火を vitāna-「配備」と総称することがある。祭場に留まることは avasāna-「定住にはいること」である。védi-については→ 6。グリヒヤ祭には aupāsana-「礼拝用の火」など、主として家庭内に設置されている、または、される火が用いられる。ヒンドゥー儀礼, タントラ儀礼には maṇḍapa-, kuṇḍa-, maṇḍala- が使われる(→ 10.)。時間については, → 12.。

祭式における「不殺生」の観念については屢々論じられている: ALSDORF, Ludwig, *Beiträge zur Geschichte von Vegetarismus und Rinderverehrung in Indien*, Ak. Mainz 1962 (*Kl. Schr.*, Nachtr. 831-899; SCHMIDT, Hanns-Peter, *The Origin of ahimsā*,

Mél. Renou (1968), 625-655; Ahimsā and Rebirth, *Inside the Texts, Beyond the Texts*, Cambridge Mass. 1997 [1998], 205-234; BODEWITZ, Henk W., *Hindu ahimsā and its Roots, Violence Denied*, Leiden 1999, 17-41 など参照。祭式行為による罪悪と償いについては, → 22. (参考資料 5.)。

祭式の内面化と世俗化は特に Agnihotra に関して著しい展開を見せた。ŚB, JB (Vādhūla-Anvākhāna にパラレル) には、供物が見つからない場合には「信じる思い(śraddā-)に真実(である祭詞)を献供する」(祭詞を信じて唱える)という Yājñavalkya の教説と、これをさらに発展させた「呼吸することが Agnihotra である」という結論が現れる(→ 7.4.2. 阪本〔後藤〕純子「究極の Agnihotra (1) - Vādhūla-Anvākhāna II 13 -」, 「究極の Agnihotra (2) - ŚB-M XI 3,1, ŚB-K III 1,4, JB I 19f., Vādhūla-Anvākhāna II 13 -」)。ŚB, JB, Up. の五火説(Janaka に帰せられる)では「食べること」と「性交」も献供と等しく、その結果生まれる「息子」が「来世」であると説かれる(→ 7.4.2., SAKAMOTO-GOTO, Junko, *Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka; kathām-katham agnihotrām juhutha - Janakas Trickfrage in ŚB XI 6,2,1-*)。上記のような思想潮流の結果として「プラーナーグニホトラ」(日に2度の食事を自らに献供することを Agnihotra であるとする)が成立する: BODEWITZ, Henk W., *Jaiminīya Brāhmaṇa I, 1-65. Translation and Commentary with a Study Agnihotra and Prāṇāgnihotra*, Leiden 1973, 213-343 参照。

「祭式と布施の効力」(iṣṭāpūrtā-) からカルマン(kārman-「行為, 業」)への展開については, → 1.3.。

14. 材料 (dravya)

供物またはその材料(祭官ほかが饗食に与ることも): 動物(山羊, 羊, 牛, 馬), 穀物(大麦, 米, 黍), 乳製品各種(バター [本来 ājya-], 液体バター [本来 ghṛtā-], 生乳 kṣīrā-, 新鮮バター nāvanīta-, 酸乳 dādhi-, sarpīṣ- [クリーム?]) な